



大雪

ゼリーナ・ヘンツ 文

アロイス・カリジェ 絵

生野幸吉 訳

岩波書店 1965年 2200円

スイスの山に住むウルスリとフルリーナの兄妹は、明日のそり大会のために準備をしています。ウルスリは、そりの飾りにする毛糸の房をもらってくるように、雪の中、妹をむりやりふもとの村まで使いに出します。苦勞して毛糸をもらったフルリーナは、帰り道で雪崩にまきこまれてしまいます。帰ってこない妹を心配して探しに出かけたウルスリは、雪崩で倒れてしまった大きな”あらしの木”（モミの木）の下から、フルリーナを助け出します。次の日、二人は、毛糸の房と倒れた”あらしの木”の枝で美しく飾ったそりで、そり大会に出場し、楽しく一日を過ごします。そして春になると、倒れてしまった木の代わりに、新しい”あらしの木”を植えるのでした。

スイスの山間の村の生活、自然の厳しさや美しさ、子ども達の喜び、悲しみがいきいきと描かれています。詩人のヘンツの文章に、現代の最もすぐれた絵本作家のひとりと言われるカリジェが絵をつけた、大型絵本です。美しく力強い絵からは清冽なスイスの山の空気が感じられます。画家としても著名なカリジェは、1966年に第1回の国際アンデルセン賞画家賞を受賞しています。シリーズには「ウルスリのすず」「フルリーナと山の鳥」があります。



したきりすずめ

石井桃子 再話

赤羽末吉 画

福音館書店 1982年 1500円

昔あるところにじいさとばあさがすんでいました。じいさは1羽のすずめを飼って、大事に世話をしていました。ある日すずめは、ばあさの糊を舐めてしまい、怒ったばあさから舌を切られてしまいます。それを知ったじいさは「おら、すずめにあやまってくる」と、「すずめや すずめ すずめのおやどは どこじゃいな ちゅんちゅん」と山へ入っていきます。やっとすずめのお宿にたどりついたじいさは、歓待され、おみやげに宝のつまった「ちいさいつづら」をもらって帰ります。宝がもっとほしくなった欲深なばあさは「大きいつづら」をもらおうとすずめのお宿にでかけますが…。

代表的な日本の昔話が、すぐれた再話者と画家を得て絵本になりました。やさしくてリズムのある文章は、声にだして読むと耳に快く響きます。大人も一緒に楽しみながら、子ども達に読んであげてください。赤羽末吉の絵は、ユーモラスで力強く、格調が高い日本画です。国際的にも高く評価され、1980年には国際アンデルセン賞画家賞を受賞しています。「よき一冊の絵本は、よき伝統につながると、私は信じています」（「国際アンデルセン賞画家賞授賞式挨拶」より）。赤羽末吉の日本の昔話絵本には「かさじぞう」「だいくとおにろく」「ももたろう」などがあります。



時計づくりのジョニー

エドワード・アーディゾーニ 作

あべきみこ 訳

こぐま社 1998年 1300円

ジョニーは手先が器用で、ものを作るのが大好きな男の子です。ある日、『大時計のつくりかた』というお気に入りの本を見ていて、大時計を作ろうと決心します。両親、学校の先生や子どもたちからは、できっこないと言われ相手にされませんが、スザンナだけはジョニーに味方してくれました。家で大時計を作っていると両親がお手伝いを言いつけるので、ずいぶん時間はかかりましたが、時計を入れる立派な箱ができあがりました。歯車や振り子など、自分で作れないものは、スザンナに相談して、鍛冶屋のジョーからもらうことができました。そして、ついに大時計は完成しました。

まだ小さいからできるはずがないと、周りから認められなくても、自分で部品を集めて大時計を作り上げるジョニーのひたむきな姿が描かれています。できあがった大時計が玄関に飾られ、両親や学校のみんなからジョニーが認められる結末が深い満足感を与えます。ペン画と水彩画が交互に配されている絵は、登場人物をいきいきと描き出しています。エドワード・アーディゾーニは、20世紀のイギリスを代表する絵本作家・さし絵画家の1人です。「チムとゆうかなんせんちょうさん」から始まるチムシリーズや「まいごになったおにんぎょう」などの作品があります。



りすのナトキンのおはなし

ビアトリクス・ポター 作・絵
いしいももこ 訳

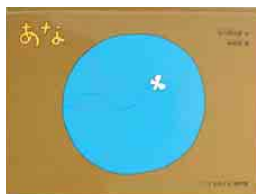
福音館書店 2002年（初版1973年） 700円

りすのナトキンは、トインクルベリという兄さんや大勢のいとこたちと湖のそばの森に住んでいました。ある秋、りすたちは、湖の真ん中にあるふくろうじまに、木の実を採りに出かけました。りすたちは、島に住むふくろうのブラウンじいさまに丁寧にあいさつをしましたが、生意気なナトキンは、じいさまの前でふざけてなぞかけ歌を歌ってばかりでした。6日目、不作法なナトキンは、とうとうブラウンじいさまにつかまり、命からがら逃げ出した時にしっぽがちぎれてしまいます。

このお話は、ビアトリクス・ポターが愛した湖水地方が舞台となっており、その美しい景色が柔らかな色調の水彩画で描かれています。「ピーターラビットの絵本」シリーズに登場する動物たちは、少女時代から小動物の観察やスケッチをしていたポターの厳密な観察眼に裏付けられ、写実的にいきいきと描かれています。シリーズは「ピーターラビットのおはなし」など24冊あり、大人のてのひらにおさまるほどの小さな絵本で、100年以上子どもたちに愛され続けています。

あな

谷川俊太郎 作
和田誠 画



福音館書店 1983年 800円

日曜日の朝、なにもすることがなかったので、ひろしは穴を掘り始めました。おかあさん、妹のゆきこ、隣のしゅうじくん、おとうさんが次々に見にきます。穴の中に座り込むと、しずかで土のいいにおい。「これは、ぼくのあなだ」とひろしは思います。



あひるのバーバちゃん

かんざわとしこ 作
やまわきゆりこ 絵

偕成社 1974年 800円

あひるのバーバちゃんは、スーパーで買ったおいしいものを入れるため、ポケットがいっぱいのすてきなリュックサックを買いました。迷子のひよこたちもポケットに入れて、家まで送り届けます。買い物がすてきなピクニックになりました。シリーズには「バーバちゃんのおみまい」などがあります。



あめがふるとき ちょうちょうはどこへ

メイ・ゲアリック 文
レナード・ワイスガード 絵
岡部うた子 訳
金の星社 1974年 1000円

雨がふってきたら、やさしいはねをしたちょうちょうは、どこへいくのでしょうか。もぐらやみつばち、ことりやねこ、ほかの動物が雨のときどうしているか、私は知っているけれど、ちょうちょうだけはわかりません。

アンジェリーナはバレリーナ

キャサリン・ホラバード 文

ヘレン・クレイグ 絵

おかだよしえ 訳

講談社 2003年（初版1985年大日本絵画）

1600円



ねずみの女の子アンジェリーナは、バレエが大好きです。踊りだしたらもう夢中で、遅刻したり、ミルクのつぼをひっくりかえしたり…。困ったお母さんはお父さんと相談して、アンジェリーナをバレエ教室に通わせることにしました。はじめ、1985年に大日本絵画より「バレエのすきなアンジェリーナ」として出版されました。シリーズには「アンジェリーナはじめてのステージ」などがあります。



海へのあさ

ロバート・マックロスキー 文・絵

石井桃子 訳

岩波書店 1978年 1700円

ある朝、歯が抜けかけているのに気づいたサリーは、お母さんに大きな子になったしるしだと言われて、動物たちや港で会った人みんなに報告します。はまぐりをとったり、お父さんとボートで港へ買い物に行ったり、海辺の生活が描かれています。

うらしまたろう

時田史郎 再話

秋野不矩 画



福音館書店 1974年 900円

うらしまたろうは、いじめられていた亀を助けたお礼に竜宮へ招かれます。竜宮で楽しく暮らすうちに、うらしまたろうは里が恋しくなり、玉手箱をもらって地上へ帰ります。有名な昔話の絵本です。



おおきな きがほしい

さとうさとる 文
むらかみつとむ 絵

偕成社 1971年 1000円

大きな大きな木があるといいな。大きな木にはしごをかけて、その上にぼくの小屋を作って、妹のかよちゃんを呼べるようにつりかごを作って、その上にりすの親子が住んでいて…。かおるのすてきな木への思いは、どんどんふくらみます。



おしゃべりなたまごやき

寺村輝夫 作
長新太 画

福音館書店 1972年 1100円

目玉焼きの大好きな王さまは、遊び時間にお城のにわとり小屋の鍵を開けてしまいます。すると、小屋から出てきたにわとりたちが、王さまを追いかけて城中が大騒ぎになります。にわとり小屋を開けた犯人捜しが始まりますが…。



おそばのくきはなぜあかいーにほんむかしばなしー

石井桃子 文
初山滋 絵

岩波書店 1954年 880円

おそばとむぎが大きな川のそばで話をしていると、おじいさんが自分を向こう岸に渡してくれと頼みます。むぎは断りますが、おそばはおじいさんを背負って、凍えるように寒い川を渡ります。おそばの足は真っ赤になってしまいました。他に「おししのくびはなぜあかい」「うみのみずはなぜからい」が入っています。



おっきょちゃんとかっぱ

長谷川摂子 文

降矢奈々 絵

福音館書店 1997年 800円

おっきょちゃんはカッパの子に誘われて、水底のお祭りへ行きます。カッパたちの大歓迎を受けたおっきょちゃんは、水の外のことを全部忘れてカッパの子どもになってしまいます。ところが、流れてきた人形を見たたん、お母さんが恋しくなって…。



おふろやさん

西村繁男 作

福音館書店 1983年 800円

あっちゃんはお父さんとお母さんと赤ちゃんと一緒に
おふろやさんに行きました。友だちと会って遊んだり、
湯船であばれて叱られる子どもたちを見たり、入っ
てから出てくるまでのおふろやさんの様子が絵だけで詳
しく描かれています。



おまたせクッキー

バット=ハッチンス 作

乾侑美子 訳

偕成社 1987年 1200円

ピクトリアとサムがお母さんの焼いたクッキーを食
べようとする、玄関のベルが「ピンポーン」。ベル
が鳴るたびにお客さんが増え、クッキーが足りなくな
りそうになったときやってきたのは…。



かぜはどこへいくの

シャーロット＝ズロトウ 作

ハワード＝ノッツ 絵

まつおかきょうこ 訳

偕成社 1981年 1000円

「昼がおしまいになったらお日様はどこへいくの？」
「山はてっぺんまで行ったらどこへいくの?」。男の子の問いにお母さんは、この世のものでおしまいになるものは何もなく、別の場所で再び別の形で始まるのだと教えます。



がちょうのペチューニア

ロジャー・デュボワザン 作

まつおかきょうこ 訳

富山房 1999年 (初版1978年佑学社)
1400円

おばかさんのがちょうのペチューニアがある日、本を拾いました。本を持っているだけですから賢くなった気分のペチューニアがいい加減な助言をするので、まわりの動物たちはひどい目にあってしまいます。はじめ、1978年に佑学社より「おばかさんのペチューニア」として出版されました。シリーズには「ペチューニアのだいりょこう」などがあります。



きつね森の山男

馬場のぼる 作

こぐま社 1974年 1300円

きつね森のキツネと、キツネの毛皮をねらうさむがりの殿さまの戦争が始まりました。この戦争に巻き込まれた大根つくりの名人の山男は、毛皮よりもっとあたたまる方法を殿さまに教えてあげます。

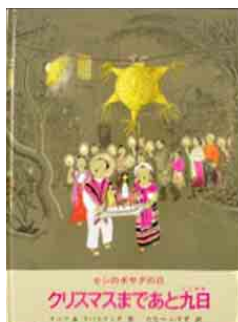


キャベツくん

長新太 文・絵

文研出版 1980年 1300円

キャベツくんがおなががすいたブタヤマさんにあいました。ブタヤマさんがキャベツくんを食べようとすると、キャベツくんは「ぼくをたべると、キャベツになるよ!」。キャベツになった動物が次々と空に浮かぶ奇想天外なお話です。シリーズには「キャベツくんとブタヤマさん」などがあります。



クリスマスまであと九日ーセシのポサダの日ー

マリー・ホール・エッツ&アウロラ・ラバスティダ 作
マリー・ホール・エッツ 画

たなべいすず 訳

富山房 1974年 1400円

メキシコに住む小さな女の子セシは、今年のはじめて自分のためのポサダ（クリスマスの特別のパーティ）をしてもらうことになり、大喜びします。メキシコのクリスマスの様子が、いきいきと描かれています。



くんちゃんのはじめてのがっこう

ドロシー・マリノ 作

まさきるりこ 訳

ペンギン社 1982年 950円

くまのくんちゃん是一年生になりました。はじめて学校に行くのはうれしいのですが、お母さんと離れたり、勉強することには不安がいっぱいです。シリーズは「くんちゃんのだいいょこう」（岩波書店刊）など全7冊です（他はすべてペンギン社刊）。



子うさぎましろのお話

ささきたづ 文
みよしせきや 絵

ポプラ社 1970年 1000円

白うさぎの子ましろは、クリスマスのプレゼントをもらいました。もっとほしくなったましろは、体を墨で黒く塗り、別のうさぎのふりをして、もう一度サンタクロースにプレゼントをもらいます。ところが、落とそうとしても、墨が取れなくなってしまいます。

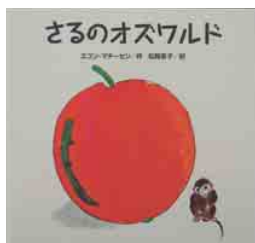


こぶじいさま

松居直 再話
赤羽末吉 画

福音館書店 1980年 743円

ある日、山で帰れなくなったこぶじいさまがお堂のなかで寝ていると、鬼がやってきて、お堂のまわりで踊りだしました。踊り好きのこぶじいさまが加わると、鬼は大喜びし、明日も来るようにとこぶをとあげます。



さるのオズワルド

エゴン・マチャーセン 作
松岡享子 訳

こぐま社 1998年 1300円

小さなさるのオズワルドは、仲間たちと楽しく暮らしていました。しかし、ボスさるのいばりやがくると、皆いばりやの世話をしなければなりません。オズワルドも最初はいいなりでしたが、ある時「いやだ!」と叫びました。

3 だいの機関車 (汽車のえほん 1)

ウィルバート・オードリー 作

レジナルド・ダルビー 絵

桑原三郎・清水周裕 訳

ポプラ社 2005年(初版1973年) 1000円



© 2005 Gullane (Thomas) LLC

ちびの機関車エドワード、いばりんぼうのゴードン、雨の嫌いなおしゃれなヘンリー、3 台の機関車の活躍する楽しいお話が3 つ入っています。シリーズには「機関車トーマス」「赤い機関車ジェームス」などがあります。

サンタクロースってほんとにいるの？

てるおかいつこ 文

すぎうらはんも 絵

福音館書店 [1982年] 838円



「サンタクロースってほんとにいるの?」「どうしてぼくのほしいものがわかるの?」。子どもたちがサンタクロースについて不思議に思っていることに、お父さんお母さんが答えていきます。「サンタクロースは、ほんとにいるよ」。

じごくのそうべえー桂米朝・上方落語・地獄八景よりー

田島征彦 作

童心社 1978年 1400円



軽業師そうべえは、閻魔様の判定で、歯抜き師のしかい、医者のかくあん、山伏のふっかいと共に地獄へ落とされました。しかし、4人は自分たちの仕事をいかして、色々な地獄を見事に切り抜けます。最後には閻魔様たちも手を焼いて…。シリーズには「そうべえごくらくへゆく」などがあります。



ジャムつきパンとフランシス

ラッセル・ホーバン 作

リリアン・ホーバン 絵

まつおかきょうこ 訳

好学社 1972年 971円

フランシスは、ジャムつきパンが大好きです。お父さんやお母さんが何を言っても、ジャムつきパンばかり食べていました。次の日、フランシスの食事に出されたのは、朝食も昼食もおやつもジャムつきパンでした。そして、夕食に出されたのもジャムつきパンで…。シリーズは「フランシスのいえで」など全4冊です。



ジルベルトとかぜ

マリー・ホール・エッツ 作

たなべいすず 訳

富山房 1975年 1200円

小さな男の子ジルベルトと風のお話です。ジルベルトは風と遊ぶのが大好きです。かけっこしたり、しゃぼん玉をとぼしたり…。落ち着いた色彩の背景に描かれた白い色によって、色々な表情を見せる風の動きが、いきいきと表現されています。



スイミー—ちいさなかしこいさかなのはなし—

レオ・レオニ 作

谷川俊太郎 訳

好学社 1969年 1456円

スイミーはきょうだいの中で1匹だけ黒い魚でした。ある日、大きな魚が皆を食べてしまい、スイミーだけが残りました。広い海で、自分とよく似た赤い魚たちを見つけたスイミーは、食べられないよう、すばらしいことを考えました。



スキーをはいたねこのヘンリー

メリー・カルホーン 文
エリック・イングラハム 絵

猪熊葉子 訳

リブリオ出版 2002年（初版1989年佑学社）
1500円

猫のヘンリーは、後ろ足で立って歩くことができます。うちの人たちと遊びに来た山小屋に、ヘンリーは置いてけぼりにされてしまいました。雪の中、ヘンリーはスキーをはいて帰る決心をします。

せんたくかあちゃん

さとうわきこ 作・絵



福音館書店 1982年 800円

かあちゃんは洗濯が大好きです。家中の服やシーツを洗うと、今度は犬や猫、子どもたちまで、ありとあらゆるものを洗濯しました。庭から向かいの森までいっぱい洗濯物を干したところに、汚いかみなりさまが落ちてきて…。

そらいろのたね

なかがわりえこ 文
おおむらゆりこ 絵



福音館書店 1967年 743円

ゆうじは、きつねと取り替えたそらいろのたねを庭に植えました。その種から、小さな空色の家が出てきました。家は子どもたちや動物が入るたびに、どんどん大きくなり、お城みたいになりました。そこへ、きつねがやってきて…。

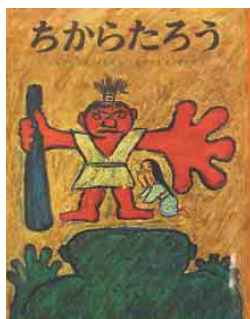
ターちゃんとペリカン

ドン・フリーマン 作
さいおんじさちこ 訳

ほるぷ出版 1975年 1500円



毎年夏休みに、小さな男の子ターちゃんは、おとうさんとおかあさんと一緒に海辺でキャンプします。今年は新しい長靴をはいて、初めて魚釣りにでかけました。顔なじみのペリカンに再会し、ペリカンは魚をとるところをみせてくれますが…。



ちからたろう

いまえよしとも 文
たしませいぞう 絵

ポプラ社 1967年 1000円

じいさまとばあさまがこんび（垢）で作った人形は、やがて強い男の子、ちからたろうになります。旅に出たちからたろうは、途中出会ったみどうっこたろう、いしこたろうの2人の仲間とともに、化け物を見事に退治し、長者の娘の婿になります。

にげだしたひげ

シビル・ウェッタシンハ 作
のぐちただし 訳

木城えほんの郷 2003年（初版1988年福武書店）
1200円



ある日、バブンじいさんのひげは、切られるのは嫌だと逃げ出しました。ひげはたちまち部屋いっぱいのにびて、外へとびだし、どんどんのびていきました。ひげは、猫も鳥も猿も犬も大人も子どもも木も家も、みんなぐるぐる巻きにしてしまいます。



ねえ、どれがいい？

ジョン・バーニンガム 作

まつかわまゆみ 訳

評論社 1983年 1300円

「ねえ、どれがいい？」という問いかけのあとに、いろいろな選択肢が次々としめされます。「へびにまかれるの」「魚にのまれるの」「わにに食べられるの」「さいにつぶされるのとき」というように、そのどれもが、奇想天外でおかしなものばかりです。



ねずみのマウスキンときんいろのいえ

エドナ・ミラー 作

今泉吉晴 訳

さ・え・ら書房 1980年 1000円

ねずみのマウスキンは、ある夜、かぼちゃの提灯を見つけ、そこに住むことにしました。中は快適で、マウスキンはすっかり気に入ります。やがて、寒い冬がくると、森の動物たちに、この家では冬越えは無理だと言われてしまいますが…。シリーズには「ねずみのマウスキンとふゆのぼうけん」などがあります。



野うさぎのフルー

リダ・フォシェ 文

フェードル・ロジャンコフスキー 絵

いしいももこ 訳編

童話館出版 2002年（初版1964年福音館書店）
1500円

野うさぎのフルーは、速い足や大きな耳といった「三つのおくりもの」を使って、森で暮らしていました。ある時、フルーは娘うさぎキャプシーヌと出会います。大きな危険と長い冬を乗り越え、やがて2匹の間には愛が生まれます。



歯いしゃのチュー先生

ウィリアム・スタイク 文・絵
うつみまお 訳

評論社 1991年 1300円

ネズミのチュー先生は腕利きの歯医者です。しかし、猫などの危険な動物の治療はしません。ところがある日、キツネの紳士が歯の痛みに泣きながらやって来ました。かわいそうになった先生は、キツネの治療をすることにしますが…。他に「ねずみの歯いしゃさんアフリカへいく」があります(セーラー出版刊)。



はちうえはぼくにまかせて

ジーン・ジオン 作
マーガレット・ブロイ・グレーム 絵
もりひさし 訳
ペンギン社 1981年 1200円

小さな男の子トミーは、夏休みに旅行する人たちの鉢植を預かることにします。トミーが上手に世話をしたので、植物はどんどん茂り、家の中はジャングルのようになってしまいました。そこで、トミーは本を読み、工夫を重ねます。



へびのクリクター

トミー・ウンゲラー 作
中野完二 訳

文化出版局 1974年 971円

ボドさんは、ブラジルの息子から誕生日に贈られたお祝いのへびにクリクターと名前をつけ、子どものようにかわいがりました。クリクターは親切で賢く、子どもたちの間でも人気者です。ある晩、ボドさんの家にどろぼうが入り…。



ヘンゼルとグレーテル

グリム 〔作〕

バーナディット・ワッツ 絵

相良守峯 訳

岩波書店 1985年 1900円

親に捨てられたヘンゼルとグレーテルの兄妹は、森をさまよい歩くうち、お菓子の家を見つけました。やさしいおばあさんが出てきて、ごちそうしてくれましたが、それは悪い魔法使いだったのです。有名なグリムの昔話です。



マイク・マリガンとスチーム・ショベル

バージニア・リー・バートン 文・絵

いしいももこ 訳

童話館出版 1995年（初版1978年福音館書店）
1500円

マイク・マリガンとスチーム・ショベルのメアリ・アンは、長い間いっしょに仕事をしてきましたが、新式のショベルの発明で仕事がなくなりました。ある日、ふたりは、田舎の市役所の地下室の穴を1日で掘ることになり…。



まいごになったおにんぎょう

A. アーディゾーニ 文

E. アーディゾーニ 絵

石井桃子 訳

岩波書店 1983年 800円

小さいお人形がスーパーの冷凍庫におっこちて、まいごになってしまいました。ある日、女の子がお人形に気づきました。寒そうで、さびしそうなお人形のために、女の子は帽子とオーバーと服を作って、お人形に届けました。

マンヒのいえ

クォン・ユンドク 文・絵

みせけい 訳



セーラー出版 1998年 1500円

韓国の男の子マンヒは、狭いアパートからおじいちゃん、おばあちゃんの広い家に引っ越します。庭、台所、納屋、屋上、お風呂…、マンヒと3匹の犬が家を案内します。明るく精密な絵から、韓国の住まいの様子がよくわかります。

みっつのねがいごと

マーゴット・ツェマック 文・絵

小風さち 訳



岩波書店 2003年 840円

きこりの夫婦が、森で助けた小鬼から、お礼に3つの願い事をかなえてやる、といわれます。貧しい夫婦は、いろいろ願い事を考えますが、きこりがうっかり願ってしまったのは…。有名な昔話の絵本です。

もりのこびとたち

エルサ・ベスコフ 作・絵

おおつかゆうぞう 訳



福音館書店 1981年 1300円

深い深い森の奥、松の木の根本にこびとの一家が住んでいます。雄々しいおとうさんとやさしいおかあさん、それに4人の子どもたちです。妖精と遊んだり、ふくろうの学校に入ったり…。こびとたちの四季の生活が、美しい絵で描かれています。



よあけ

ユリー・シュルヴィッツ 作・画

瀬田貞二 訳

福音館書店 1977年 1200円

静かな山の湖の、真夜中から夜明けまでの刻々と変化する自然を、詩のような短い文と水彩の美しい絵で、見事に描いた絵本です。おじいさんと孫が湖にボートをこぎだすと、太陽がのぼり、すべてが緑に輝きます。

